まちの ね

machi-no ne

2024.秋
創刊号

【特集】

どんなところ？

まちの保育園・こども園

CONTENTS

02 こえをきく 子どもたちの学びの物語り
└ まちの保育園 南青山「布、色、身体」

04 特集 どんなところ？
まちの保育園・こども園

06 いまと未来を考える 保育・教育をめぐる 社会のあれこれ
└ 最近よく耳にする「探究」って？

07 まちのねのね まちのチームの読む辞典 あ〜き

08 まざりあう まちの研究所の共創プロジェクト coしぶや

おしらせ

こどもたちの学びの物語りを きく

まちの保育園 南青山 乳児クラス

「布、色、身体」

イッセイ ミヤケ
コラボレーション プロジェクト

現在、まちの保育園 南青山にて、
子どもたちが日々ふれあっている色あざやかな布たち。

これらは、アパレルブランド、
A-POC ABLE ISSEY MIYAKEさんに
ご提供いただいたものです。

自社であたらしい布の開発をされており、
デザインや見た目だけでなく、その触り心地・着心地や、
あらたな素材を追求され、多様な生地を制作しているとのこと。

大人でもハッとするような、不思議な感触。

私たちは、子どもたちの布への関わりを
じっくりと観察することから始めたいと考えました。

まちの保育園 南青山

2024年・4月、ポーラ青山ビルディング内に開園。
大きな窓から自然光が溢れる明るい園内。
「からだ」も「こころ」も目一杯使える場をめざして、
白を基調とした空間に、
隆起のある創造的なランドスケープが特徴です。
乳幼児期の子どもたちが一人ひとり尊重され、
探究的な学びを通して世界に出会い、
豊かな感受性を育てていきたいと考えています。

ペダゴジカルパートナーの こえ

美しく特別な「布」との新しい出会いの中で、子どもたちの「布」へのアプローチが
とてもカラフルでした。頭で考える前に手や身体が動き出し、触り心地、
布を通して見る世界の楽しさ、衣擦れの音、視覚的な面白さなど、
貪欲に感じとろうとする子どもたちの姿が見られました。

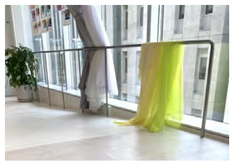
アトリエリスタの津田純佳さんは「美しさと好奇心はとても密接な関係性がある」と著書*に
記しておられます。Kさんが布を見て「えのぐ！」という繊細な言葉で表したこと、手と身体と
感情をフルに使って探究が止まらない様子から、まさにこの言葉の意味を考えさせられます。
美しく特別な「布」は、イッセイミヤケの「美」と「機能性」の探究から生まれた作品でもあり、
子どもたちはそのことを知らずとも敏感に感じ取っているのではないでしょうか。

*アトリエからはじまる「探究」：日本におけるレッジョ・インスパイアの乳幼児教育／浅井幸子・津田純佳・渋谷区立渋谷保育園（2023 中央法規出版）

REPORT ▸▸▸ まちのこども園 代々木上原にてワークショップを行いました！

代々木上原園のある渋谷区にオフィスを構える
イッセイミヤケさん。今回は、特別な技術を使った
あたらしい布の研究開発も行う、デザイナーの
宮前義之さんとエンジニアリングチームの皆さん
にお越しいただき、親子でミニチュアの服を作る
ワークショップを開催。本物に触れ、楽しみながら
布の可能性を探究する豊かな時間となりました。

大胆で美しい色、繊細で個性的なテクスチャー。いかようにも変化する布のカタチ。
素材と"出合う"瞬間を大切にしたい。
そこで、「丸める」「たたむ」「かける」の三つのカタチで子どもたちに提供することにしました。



アトリエに持ってきた布を見て、
Kさんが、「**えのぐ！**」と言いました。

布の「色」にインスピレーションを得たのでしょうか、
布を「えのぐ」と表わす感性を大切に捉えていきたいと思いました。
色は感情や感覚に大きく作用すると言われています。
子どもたちにとって、色はどのような存在なのでしょうか。

Rさんは青、Kさんは紫、Lさんはピンクをまず手に取りました。畳んである布を両手を大きく使って開いていきます。

小さく折り畳められていた布を広げると、
自分の身体よりも大きくなりました。
布をぐるぐるまわす、ふる、引きずって歩く、走る・・・
大きな布だからこそ動きたくなる、動かしたくなる・・・

布をかぶる。
布の中から見る世界はどんな世界？何色の世界？

布を1枚1枚丁寧に掛けていく。
掛ける位置によって
彩りが変化していきます。
色と色、光と色の関係性。

南青山園の床は、自然の大地の
ように凹凸の隆起があります。
そこに大きく広げられた
やわらかな色。
心地よさそうにゴロンと
横になります。

テーブルにかけると、
パッと華やかになりました。
「**ここはレストラン！**」

早速ご馳走の準備に
取りかかります。
お客さんもお気に入りの
布を持って座りました。

一枚の布を一緒に広げてみました。
Kさんが布の端を持ち、
保育者は反対側の端を持って
広げていきます。

風がはらむと、ふわりと浮きます。
そっと床においても空気が入り、
なかなかまっすぐになりません。

Kさんは、「そ～っと、そっとね」と
手を一番大きなバーにして
アイロンをかけるように
撫でていきます。

「そ～っと、そっとね」
そう言いながら、
次々に布を広げていきます。
時々、止まって見渡して、
また広げていきます。

園庭から戻ってきた先生に、Kさんが言いました。

「**えのぐ！**」

「**すごいよ！**」「**色がかわる！**」

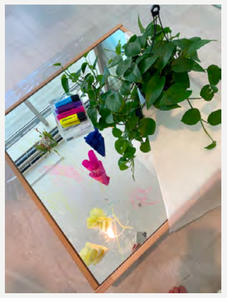
「**いま、つくっていたんだよ**」

床一面に敷き詰められた布は、
「えのぐ」というKさんの考えのとおりだと感じました。

この探究の後、「えのぐ！」と表現した
子どもの感性を受けて
環境を再構成しました。

天井から吊るした布が映るように、
鏡と紙とスタビロ（筆記具）を置いて。
絵の具のパレットのように小さな布が
窓辺の一角を彩り、子どもたちの
アイデアでつながっていくように。

ここからカラフルな布が子どもたちの
手により、また変化していきます。



【特集】

どんなところ？

まちの保育園 こども園

まちの保育園・こども園は、東京都内
【小竹向原・吉祥寺・六本木・南青山・代々木上原・代々木公園】
の6か所で認可保育所・認定こども園を運営しています。

最初の園である小竹向原園の開園は、2011年。
保育園を『まち』にひらき、まちぐるみで子育てをする。子どもを中心に
コミュニティの輪が広がって、まち全体がより豊かなものになったり、
地域の資源を子どもの学びに生かすことで、
多様な価値観に触れる機会が増えていく。

そんな想いから「まちの保育園」と名付けました。

コミュニティの創造

家庭との連携

一市民としての

こどもの尊重

子どもが一市民として歓迎され、
その権利が尊重されること。
大切な「乳幼児期」を充実したものにできるように、
園のコミュニティは責任を持ち、
また、私たち大人も日々を一緒に楽しむこと。
子どもにとって、それも大事なことだと思います。
ここでは、子どもも大人も、
主人公です。

子どもと地域をつなげる コミュニティコーディネーター

各園には、コミュニティコーディネーターと呼ばれる職員がいます。子どもの興味・関心に寄り添いながら、地域と子ども・保護者・保育者の橋渡しをする役割です。地域との関係性を築きながら、子どもを真ん中に、子どもたちに様々な人格・才能との出会いや経験を持ってもらえるよう、保育者と連携を取って環境を整えて行きます。

取り組みは正しさよりも、おもしろさで。まずはやってみるという心を持って。なにより、自分がわくわくすることがよき橋渡しになると考えています。また、コミュニティコーディネーターは、保護者・保育者・地域の人たち同士をつなげる存在でもあります。園内外のあらゆるコミュニティを調整する、大切な役割です。

園の入り口にカフェがある理由

「まちの保育園 小竹向原」の横には
ベーカリーカフェ「まちのパーラー」
「まちの保育園 六本木」の軒下には
カフェスタンド「まちの本とサンドイッチ」があります。

誰でも日常的に訪れ、子どもの存在を感じることのできるカフェは、園と地域をゆるやかにつなぐ中間地点。送り迎えのついでに立ち寄る保護者のちょっとした息抜きだったり、地域の常連さんが園にきっかけをもたらしてくれたり、新たな出会いや繋がりを生んだり。“食”もコミュニティに欠かせない存在だと考えています。

プロセスの価値の可視化

子どもたちが自身の興味や関心に基づいて、仮説を持ち、それを探究していくプロセスをとても大事にしています。子どもたちの学びの過程を写真と文字で記録したものが「ドキュメンテーション」です。これらは紙にまとめて園内に掲示したり、オンラインツールで保護者にシェアしたりしています。

こうした"学びの物語"を可視化することで、子どもたちの世界に触れ、子どもの学びを応援し、ときに学びにかかわったりしながら、子どもの理解を深めていきます。さらに、他の保育者の視点が加わったり、「家でもやってみよう」と園と家庭の連続した関係性が生まれたり、保護者からさらなるアイデアや協力をもらえたり、親同士の交流が生まれたり・・・。

私たちにとって、とても大事にしているものです。

「対話文化」を大切に

子どもとの対話はもちろんですが、職員同士の「対話」をとても大切にしています。お互いの意見をぶつけ合うのではなく、「相手の意見を否定しない」対話です。

そして、すべての意見をもとに、みんなでどうするか考えていく。そうすることで、保育者同士の風通しがよくなり、子どもとの向き合い方にも良い影響があるのではないかと信じています。

先述のドキュメンテーションも、対話のきっかけとなるツールとして大きな役割を果たしています。

各園にあるアトリエの存在

まちの保育園・こども園の各園にはアトリエがあります。アトリエは、園全体のアイデンティティを形成し、子どもたちの創造活動を支える場所でもあります。何より、人の心を動かし、たのしく、愛があり、常に人を惹きつける存在であることが、理想だと思うのです。

アトリエには、土粘土や絵の具、筆、紙、自然物、企業から寄付をいただいた廃材など、一見どう使うのか想像できないような物まで、さまざまな素材を用意して、子どもたちが何かに興味を持ったとき、自ら探究・探索し、創作活動・表現を広げていくきっかけをつくってくれます。

このような子どもの創造活動と創造的環境を支えているのは「アトリエリスタ」の存在です。保育・教育の伴走者であり、子どもたちの探究活動を支える「ペダゴジカルパートナー」と共に、多様な視点で園全体をサポートしています。が何かに興味を持ったとき、自ら探究・探索し、創作活動・表現を広げていくきっかけをつくってくれます。

わたしたちにとっての「食」

乳幼児期は「食」を通して身体の基礎がつくられる大切な時期です。わたしたちは子どもたちの身体と心の成長を促す給食をつくること、そして五感を使った食との出会いを大切にしたいと考えています。

献立は、各園の栄養士が栄養バランスを考えて作成。旬、彩り、季節感を大事に、日本の伝統行事に合わせた行事食も大切に考えています。各園、キッチンをなるべくオープンなつくりにしています。日常的に食材や調理の様子を目にすることで、キッチンスタッフとの会話が自然に生まれ、食への興味へと繋がっています。

食材はなるべく園の近隣のお店から仕入れており、お店へ見学に行くことも。各園の園庭やテラスで野菜を育てたり、食材の皮むき、魚を捌く様子を見る会など、調理前の食材に触れる機会も大切にしています。子どもたちを真ん中にして、キッチンスタッフをはじめとする職員、保護者、地域の人々が日々関わり支え合いながら生活をしています。

家庭とのパートナーシップ

まちの保育園・こども園の子どもたちの保護者は、コミュニティの中心にいる参加者です。子どもを真ん中に、園と保護者が連携して「子どもの育ち」を支えることを大切にしています。日々、ご家庭からは子育ての考え方、家庭での子どもの様子を聞かせていただき、園からは積極的に子どもの育ち・学びの姿、保育の考え方、その意味について発信していきます。

また、日頃は、保護者と園とがゆっくりと語り合う時間をとりにくいことから、様々なイベントなどを一緒に企画し開催するなどして、経験を共有しています。保護者が楽しんで参画していることは子どもにも還っていく。これまで私たちの園の活動は、自分の子どもだけでなく、ほかの家庭の子どもの成長も一緒になってよろこび合える保護者の方々との関わりに支えられてきました。

園は、まるで大きな家族のように、みんなでみんなの育ち（それは子どもに限らず大人もですが）をよろこび合える、そんな場であるように感じています。

いまと未来を考える

保育・教育をめぐる 社会のあれこれ ①

最近、よく耳にする「探究」って？

参考図書

「遊び・学びを深める 日本のプロジェクト保育 ：協働探究への誘い」

（中央法規）

今、日本の乳幼児教育は大きな改革が行われようとしています。そのキーワードの一つが「探究」です。「探究」とは、辞書で引くと「物事の意義・本質などをさぐって見きわめようとすること」（三省堂『大辞林』）とありますが、子どもたちがそれぞれの興味関心に応じて、問いをもち、試行錯誤しながら深めていく学びのあり方を探究と呼ぶようです。文部科学省の学習指導要領や、OECDがまとめたEducation 2030では、複雑で予測が困難な2030年の世界を生き抜くための力として、自ら問いを見つけ課題を解決する力、対立やジレンマがあるなか他者と協働して新たな価値を生み出す力などが強調されており、これらを育む新しい学びのスタイルとして、この「探究」が重要視されています。

> 急激に変化する社会においては、新たなものを自ら作り出す創造力や、
> 仲間と協働し、問題を解決する力がとても重要になってきます。
> この「考え問う」という力は、
> 人工知能にはない、人が持つ本質的なもので、
> その基盤は、子供が遊びや学びに夢中になる中で、
> 様々な試行錯誤体験や気づきを繰り返し、培われていきます。
> この姿が「探究」と呼ばれるものです。
>
> （学習院大学文学部教授 東京大学名誉教授 秋田 喜代美 先生）

少し小難しい話を書いてしまいましたが、そんな「探究」学習・活動について、国や自治体レベルの動きを2つご紹介をしたいと思います。

①シブヤ未来科

令和6年度より、渋谷区内のすべての公立小中学校で、平日午後の授業時間を中心に、探究「シブヤ未来科」が割り当てられることとなりました。これは全国初の取り組みになります。探究にじっくり取り組むため、教科の授業時間数を最大1割減らせる文部科学省の授業時数特例校制度を活用し、国語や算数・数学などの時数を1割削減。「総合的な学習の時間」を従来の70時間から155時間程度へ大幅に増やしています。

（出典：渋谷区教育委員会資料）

渋谷区の鳩森小学校では「勉強していることが地域や社会とつながっているという実感が薄い」という生徒からの声に課題を感じていましたが、2023年度の全国学力・学習状況調査（小6）で、「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」という質問に対して、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」が、前年度の52・9％から94・4％に増えたなど、手応えも感じているそうです。（日経新聞）

まちの研究所で運営している子育て支援センター「coしぶや」では、今年6月に渋谷区教育指導課の方をお招きしてのトークイベント【午後の授業は『探究』に!? 渋谷区公立小中学校の教育改革って？】を開催。参加者からは「とても革新的な取り組み」「リアルな話が聞けて理解が深まった」「今後もオープンに発信を続けてもらいたい」などの声が聞かれました。

②すくわくプロジェクト

東京都では、東京大学大学院教育学研究科 附属発達保育実践政策学センター（CEDEP／セデップ）との連携のもと、乳幼児の豊かな心の育ちをサポートするため、主体的・協働的な探究活動を通じて幼児教育・保育の充実を図る幼稚園・保育所等を支援する「とうきょうすくわくプログラム推進事業」に取り組んでいます。

> すくわくプログラムとは？▶ すべての乳幼児の「伸びる・育つ（すくすく）」と「好奇心・探究心（わくわく）」を応援する幼保共通のプログラムです。幼稚園や保育所といった施設類型の垣根を越え、各園の環境や強みを活かしながら、「光」「音」「植物」等のテーマに沿って、乳幼児の興味・関心に応じて多彩な体験・経験に触れ合うことのできる探究活動を実践します。
>
> （東京都広報資料）

本事業は2023年度の準備・検証段階を経て、2024年から本格的に都内全域に展開されており、今年度からは備品購入費、人件費等、プログラムの実践に係る経費への補助や研修も始まり、注目が集まっています。同プログラムに基づいた乳幼児の興味・関心に応じた探究活動の実施については、以下の内容が定義されています。

> （1）幼稚園・保育所等の各施設の環境や強みを活かしながら、乳幼児の興味・関心に応じたテーマを設定する。
> （2）テーマに関する乳幼児の興味・関心を探るため、問い掛けやアプローチなどを行う。
> （3）乳幼児の興味・関心を広げたり深めたりできるような素材や道具を準備し、環境を構成する。
> （4）グループ単位での活動等により、乳幼児同士の対話、関わりを促す。
> （5）活動中の乳幼児の言葉、表情、ジェスチャー等の表現に着目し、メモ・写真・映像等で記録する。
> （6）乳幼児一人ひとりが主体的に活動できるよう配慮した声掛け等を行う。
> （7）記録をもとに、乳幼児の関心や発見、表現を振り返る。
> （8）幼稚園・保育所等の各施設の教諭・保育者同士や保護者等に、探究活動の内容を共有する。
> （9）次の探究活動の更なる充実に向け、新たな問いや環境の構成を考える。
>
> （とうきょう すくわくプログラム推進事業実施要綱より抜粋）

私たち、まちの保育園・こども園でも、開園当初より子ども主体の学びのあり方として、探究活動に主眼をおいており、子どもたちが関わりや探究を通して、「知を自ら構築していく」ことを大切にしています。わたしたちも、この事業には積極的に参加して、園の環境を充実させるとともに、子どもたちとの探究活動をさらに深めていきたいと考えています。

本誌「まちのね」でも、子どもたちの探究の姿、学びのプロセスを今後もご紹介していきます。ぜひ、楽しみにお待ちください！

まちのねのね

まちのチームの読む辞典

まちの保育園・こども園
まちの研究所 代表
松本理寿輝

私たちの園や様々な場で、大切にされていることや文化、頻出する言葉たちを、辞典形式でお届けするコーナー。気になったところから、つまみ読みしていただきたい「読む辞典」として、私たちの周りに「ねっこ」としてある言葉たちをご紹介します。初回は、【あ】から【き】まで。

あ

【アトリエ】〈atelier〉

私たちの園には、アトリエがあります。「世界は、自分たちで変えていくことができる」。そんな感覚が、ゆるやかに、しなやかに漂う場を子どもたちと育んでいるように思います。子どもたちは、アトリエで、好奇心やセンスオブワンダーを働かせて、心も体も頭もわけずに、そのぜんぶで世界と出会っています。自身の興味や得意をベースにしながら、自分やまわりの人たち、つながるいろいろな人や状況が、こうあると素敵だなと思う方向に、身近でささやかなところから、自分たちの挑戦を楽しんでいるようです。アトリエで日々子どもたちは、遊びを発明したり、自分たちのテーマを科学者やアーティストや哲学者のように探究したり、表現で人を魅了したり、ルールも必要ならば自分たちでつくって行きます。なかなかうまくいかないこともありますが、プロセスすべてに意味がありそうなことは子どもたちが一番知っています。このアトリエには、いくつかの願いが込められています。一人ひとりの、ちがいが宝物であること。好きや得意から学びがひらかれていくワクワクする場であること。子どもたちが協働して自ら知識を生み出していく場であること。共感と思いやりに満ちた場であること。創造的な「問い」を見つけるプロセスから丁寧に支えられていること。何より、子どもたちのための場であり、生きる喜びや楽しさに満ちている場であること。アトリエは、社会と関係のない、ほんの一部のコーナーではありません。自分たちや世界の可能性を耕していくような、民主的で創造的な社会をつくっていく場なのではないかと思ったりもします。つらつら書きましたが、そんなことを考えているのは大人だけで、実は私たちはアトリエの価値や意義の半分もわかっていないかもしれません。子どもは言います。「あー、つくるって、すっきりする。」とにかく、子どもたちは、毎日たのしそうです。

【朝の会】〈あさ-の-かい〉

子どもたちは朝の会をひらき、日々の活動を自分たちで決めていきます。「園庭でダンゴムシを探したい」「地域の★★に出かけたい」「葉っぱの美術館をつくりたい」。朝の対話は、みんなで一緒に過ごしていることを感じるコミュニティの時間でもあり、お互いの考え・アイデア・興味を共有する時間になっています。そのあと、子どもたちと保育者とで話し合われた、2、3の活動に、小さなグループになって取り組んでいきます。ここから探究が始まって、数週間や数ヶ月、時には1年にも及ぶプロジェクトに繋がっていくこともしばしば。保育者が入りながら、わいわい、朝の会は行われます。これは1歳クラスの後半くらいから始まります。

い

【イントラパーソナルダイバーシティ】〈intrapersonal diversity〉

「個人内多様性」のこと。私たちは、なぜ、まちに開くのでしょう。2つの想いをよくお話しします。一つは、子どもの育ちや学びを地域・社会とつなげていきたいこと。そして、もう一つは、園が地域のウェルビーイングのためにもある、いわばまちづくりの拠点になれるのではないかという想いです。ある方から教えていただいたことで、私たちが、園をまちに開いて実感していることが、この「個人内多様性」への影響です。個人内多様性とは、個人の中に多様な視点、思考、感情、経験があること。創造性や革新性、複雑な問題解決、共感力、ストレス対処などにつながる観点として注目されています。それは、人との多様な出会いと関わり、異文化との出会い、挑戦機会などから育まれるとされています。これまで地域で様々なことを取り組んできました。色々な意義を感じてきましたが、子どもも大人もこの個人内多様性を持つ豊かさは実感していることの一つです。

【インスタグラム】〈instagram〉

子どもたちとの日々は驚きの連続。子どもと世界に出会っていくおもしろさや、それが私たちに多様な気づきをくれることや、新しく世界に出会い直す楽しさを届けてくれることなど、子育て情報やイベント情報とともに発信しています。「まちの保育園・こども園」「coしぶや」「100の食卓」「まちの本とサンドイッチ」「IIREA」色々なインスタアカウントでそれをお届けしています。お気軽に覗いてみてください。

う

【上原のフィーカ】〈uehara's fika〉

まちの保育園・こども園では各園で様々なコミュニティの取り組みがあります。代々木上原の園では、園にある地域や園のコミュニティに開かれた場「まちのま」で、親子や地域参加のフィーカが恒例になっています。フィーカとは、スウェーデンの文化の一つ。仕事や日常生活の中でリラックスしながらコーヒーやお茶を楽しむ休憩のこと。私たち、レッジョ・エミリアの国際ネットワークを通して140か国と繋がりを持っており、その中にはスウェーデンも含まれています。それが関係しているかはわかりませんが、半ば自然発生的に生まれた場と時間です。

【ウェルビーイングアンケート】〈well-being questionnaire〉

子どもも主人公ですが、保護者も、保育者も主人公。保育者のウェルビーイング（幸せ）も組織やコミュニティで大事な観点ですね。このアンケートはそのための取り組みの一つです。

え

【エコトーン】〈ecotone〉

移行帯。異なる生態系や環境の境界部分を指す概念です。たとえば、森林と草原、または川と陸地の間の移行地帯などです。自然界では、この「間」が極めて重要だということです。このエリアは両方の環境の特徴を持っていて、最も生物多様性に富み、変革種を生みやすい＝イノベーションが起こりやすいエリアだと言うのです。もし、人工開発などでこのエリアがなくなり、両環境が分断がされてしまうと「エッジ効果」と言い、どちらの生態系も乏しくなってしまうというのです。これは、生態系の話のみならず、全てのことに言えるのではないかと私たちは考えています。なので、場づくりにせよ、子どもたちの知識や経験にせよ、コミュニティや組織・チームづくりにせよ、この「エコトーン」を意識したデザインをよくしています。私たちの間では、割と頻出する言葉です。

お

【大人も主体・主人公】

〈おとな-も-しゅたい・しゅじんこう〉

「結構、大人たちだけの時間も大切にしているコミュニティです。子どもは大人のことをよく見ているので、子どものためにもよいのではないかなと思っています。

か

【カフェ】〈cafe〉

私たちの場には、カフェがあります。小竹向原の「まちのパーラー」、六本木の「まちの本とサンドイッチ」、coしぶやの中の「coの食卓」など。子どもや家族や地域の方や職員が思い思いに過ごす日常の場で、ここで色々な出会いもありますし、イベントなども行われます。パーラーのパンは、私たちの日常には欠かせません。夜はワインを囲みながらまたたのしい時間がある。子どもたちが店番をすることも、メニューの考案をすることも。ちょっとしたときに、とりあえず、「あそこに行くか」的な地域の場になっている感じが嬉しいです。

き

【キッチン】〈kitchen〉

手づくりのランチやおやつは子どもたちに人気。キッチンのスタッフが子どもたちと関わりながら、子どもたちに合わせた献立をつくっています。子どもたちの興味やイベントに合わせたメニューの考案も。食は地域との連携も進めやすい。地域に開いた離乳食講座なども企画されます。子どもの環境はキッチンスタッフの想いによっても育まれています。

【聴く】〈きく〉

私たちの周りではよく出てくる言葉です。子どもも大人も「一人ひとりの声（声なき声も含む）が聴かれていること。これは一番大切にしたいことかもしれません。そこから全てが始まりますね。しかし、それが本当に難しいことであるのも事実です。誰かがすべてを聴くのは難しいので「ふつう」のレンズを外して、お互いに聴き合うような感じのある、そして、それぞれが安心できる居場所を見つけて行けるような支えあいがある場を大切にしたいと思っています。そんな「聴く」ですが、この言葉が子どもに向けられるとき、たちまち大事な意味を持ちます。子どもを一人の市民として尊重することや、大人から子どもに一方的に知識が伝達されるのではなく、子どもを自ら知識を構築する存在としてリスペクトし、知識を共同で構築していくための主体ととらえる姿勢であるといえます。また、この「聴く」は別の見方もされていきます。世界に、もっとも耳を澄ましている存在は「子ども」かもしれないという視点です。子どもは生を授かったその瞬間から、世界によく耳を澄まし、全身で関わりながら、鋭敏な感性と開かれた知性を働かせて、自己と世界に出会っていきます。子どもたちの敏感な耳と心は、私たち大人が忘れがちな世界の美しさや繊細さを再認識させてくれたりします。子どもが「聴いている」世界を、私たちが「聴こう」とするとき、私たちの日常は、新鮮な驚きと感動のある、彩りのあるものになっていくように思います。

まざりあう

まちの研究所の
共創プロジェクト

coしぶや（こ・しぶや／神南ネウボラ子育て支援センター）

2021年夏、渋谷区役所ほど近くに開館した、妊娠・出産・子育て関連の機関が入る施設「渋谷区子育てネウボラ」。同施設内に設置された渋谷区の子育て支援センターが通称「coしぶや」。ひと月に3000組以上の家庭が利用する子育てひろば、子育て関連の相談事業、イベント等の企画、短期緊急保育（一時預かり）、コミュニティカフェ「coの食卓」の運営をまちの研究所が行っています。

どの家庭も不安なく喜びの多い子育てができるよう、渋谷区が切れ目ないサポートを行う仕組み【渋谷区子育てネウボラ】。その名を冠した施設内にある「coしぶや」は、入り口的な機能も担います。エントランスには誰でも本を読んで過ごせる大階段。奥に進むと、子どもたちが自由に探究し、ひらめきや出会いの場となるアトリエと、多世代が居心地よく過ごせるコミュニティカフェ。上階には、主に乳幼児とその保護者が気軽に過ごしたり相談できる子育てひろばがあります。職員には、保育士はもちろん、子育て支援員、助産師、コミュニティを豊かに繋ぎ育むコーディネーター、アトリエでの創造・探究活動をサポートするアトリエリスタが常駐。良品計画によるデザイン・設計の木の香りに包まれた空間で大人もゆったりと過ごせます。

開所から3年。利用登録者は3万人を超え、全国の自治体や企業からの視察は現在も続いています。地域との繋がりも広がり、当初からの渋谷区の企業・団体による廃材の提供の他、協働での企画も増えています。施設内では、子育て家庭同士の仲間づくり、多胎児支援、父親向け、国際家庭向け、育ちや発達・アートや音楽に関する講座、プレパパ/ママ向け、家事育児分担や保活についての企画やイベント等、渋谷で暮らす多様な人々のニーズに合わせ日々アップデートしています。

私たちが、こうして新たに子育て支援の実践の場に挑戦できることに感謝しています。これまで出会う機会のなかった家庭や子どもたちを含めた、子育て環境・家庭への理解を深めるとともに、まちの保育園・こども園が「子ども主体のまちぐるみの保育」を理念に、保護者や地域とともに子どもを育て、見守ってきた中での知見や気づきをいかしながら、地域に貢献できるよう努力してまいります。

渋谷区子育てネウボラのコンセプト「出会う、集う、語る、つながる。地域みんなでこどもを育てる」のもと、渋谷のリソースを活かしながら、多世代・多様な個性を持った人たちがつながりあう、豊かなコミュニティの場を目指していきます。

coしぶや
東京都渋谷区宇田川町5-6
渋谷区子育てネウボラ2・3F

開館日　月～金、日（休：土、祝、年末年始）
開館時間　9:00-17:00（ひろばは9:30～）
＊火のみ9:00-12:00

カフェ「coの食卓」
営業時間　9:00-17:00（16:30 L.O.）
＊火のみ9:00-14:00（13:30 L.O.）

おしらせ INFORMATION

まちの保育園・こども園 各園見学会

ご入園を検討中の方向け
現地開催・要申込

小竹向原	11／9（土）10:00～11:30
六本木	11／12（火）10:15～11:00 12／10（火）10:15～11:00
南青山	11／16（土）10:00～11:00 ●園庭開放のみ 11／20（水）16:15～17:00
吉祥寺	10／26（土）13:30～15:00
代々木上原	11／26（火）10:00～11:00 12／5（木）10:00～11:00
代々木公園	11／16（土） 第1部　10:00～11:00 第2部　11:15～12:15 ●1部・2部とも内容は同一です

一般の方向け 園見学会

現地開催・要申込

11／27（水）18:30～20:00
会場：まちの保育園 小竹向原

採用説明会

まちの保育園・こども園／まちの研究所 合同
現地・オンライン 同時開催・要申込

理念・実践紹介、多様なキャリア形成、応募方法、募集要項をお話します。園舎紹介の時間も設けます。

11／29（金）19:00～21:00
会場：まちの保育園 六本木

職員対話（ドキュメンテーション対話）へのお誘い

現地開催・要申込

まちの保育園・こども園ではドキュメンテーション等を持ち寄り、対話をする時間を設けています。ご興味がある方ならどなたでもご参加いただけます。お気軽にご参加ください！

11／29（金）19:00～20:00	吉祥寺
12／4（水）13:30～14:30	小竹向原
12／20（金）19:00～20:00	南青山
2025	
1／21（火）19:00～20:00	代々木上原
2／18（火）19:00～20:00	代々木公園
3／26（水）13:30～14:30	小竹向原

noteをはじめました

ご存知の方にはより深く、
はじめましての方にも興味深く
ご覧いただけるような読み物を更新していきます。

コミュニティコーディネーター（CC）講座

東京大学CEDEPと共に毎年開催している、コミュニティコーディネーターに関する講座です。

現地・オンライン
同時開催・要申込

東京大学CEDEP×まちの保育園・こども園
「コミュニティコーディネーター講座」2024
12／21（土）14:00～19:00
会場：UNIVERSITY of CREATIVITY（UoC）

Neurodiversity School in Tokyo 開校

伊藤穣一氏と共にNPO法人を立ち上げ、東京都港区にオルタナティブスクール「ニューロダイバーシティ・スクール・イン 東京（NSIT）」を開校しました。障害や違いに関わらず、すべての子どもたちが共に学べる小さな学校です。

NSIT NEURODIVERSITY SCHOOL IN TOKYO

まちのアカデミー 開講中

保育・教育、子どもに関わる全ての人たちのための学び合いのオンラインプラットフォーム。
多彩なパートナーによる講座が開催中です。

まちのアカデミー MACHI-NO ACADEMY

あたらしい書籍が出版されました

わたしたちの実践や想いを交えながら素敵にまとめていただきました。今後も、保育・教育の実践や子どもの豊かさを社会に発信する活動を大切にしてゆきます。

普通をずらして生きる
ニューロダイバーシティ入門
伊藤穣一、松本理寿輝 著
リンクタイズ

遊び・学びを深める
日本のプロジェクト保育
協働探究への誘い
秋田喜代美、松本理寿輝 監著
中央法規出版

あとがき　「まちのね」第一号、いかがでしたでしょうか。ホームページやInstagramでは伝えきれていなかった想いや、お手元に置いて、ふっと読み返していただけるような誌面づくりをめざします。次号は冬頃発行予定です。これからどうぞよろしくお願いいたします！

誌面に関するお問い合わせ：press@machihoiku.jp

発行日：2024年10月31日　発行：ナチュラルスマイルジャパン株式会社、まちの研究所株式会社　企画・編集：まちの保育園・こども園、まちの研究所 広報部　デザイン：大和桂子
●NATURAL SMILE JAPAN,Inc / Machino Research Institute,Inc 2024 Printed in Japan